

# グループホーム利用者の地域移行・定着支援

社会福祉法人いわみ福祉会 サポートセンターふかふか 樋山季実子

社会福祉法人いわみ福祉会は、法人設立時（1974年）から地域の方とのつながりを大切にしている。その旨を法人の理念にも掲げ、取り組みを行っている。障がい福祉サービスの各事業では、理念に基づいて事業を展開している。レストラン、製造・販売する洋菓子パン、乗馬体験などを、地域の方々に利用していただき、より身近に感じていただいている。

島根県西部には、伝統芸能である石見神楽がある。いわみ福祉会でも「芸能クラブ」として石見神楽を練習し、近隣や他県でも公演に出向いている。2017年にはフランスのナント市に行き、神楽公演を行った。そのときの様子は、NHKの「ハートネットTV」にも取り上げていただき、放送されている。

筆者が勤務するサポートセンターふかふかは、共同生活援助事業（グループホーム、以下GH）を実施している。GH16か所が浜田市内と金城町にある。定員は87名である。金城町にある9か所のGHうち、3か所は夜間支援付きである。

在宅生活が難しくなり、GHに入居した事例を2つ紹介する。

Aさん（40歳代・男性）は、4年前にGHに入居した。福祉サービスを利用するのは初めてである。父母を亡くしてから、一人暮らしとなり、生活環境が悪化した。金銭管理もできていない。地域の保護司（法人の前職員）からの相談を発端として、GHを利用することとなる。入居後は、日中活動は就労継続支援A型を利用しながら、生活面での支援を充実させた。成年後見制度の申立てを支援し、保佐人が選任された。

Bさん（40歳代・女性）は、20歳代前半からアパートで一人暮らしをしていた。就労継続支援A型も利用し、生活していた。しかし、40歳代前半、事業所の販売物を盗んで換金。ローンの返済額が多額となり、月々の収支が赤字の状態でも生活していた。法テラスに相談し、自己破産手続きと、成年後見の申立を行った。A型の事業所では、窃盗が度々発覚し、就労継続支援A型からB型への変更となった。工賃が下がることで、経済的に苦しくなり、GH入居となる。入居後は、単身生活での経験を生かして、同居者に料理やゴミ分別、掃除などを教えている。

地域の方にGHを知っていただくため、町内会へ参加し、利用者自身が会費を支払うなどを行っている。新たな地域にGHを設置したときは、地域のキーパーソンに働きかけ、回覧板等で周知していく。引っ越し後には利用者と職員が共に近所へあいさつに行く。

地域の方と良好な関係を築いていくために、利用者自身が挨拶をし、町内会の環境整備等の行事に参加している。GHで避難訓練を実施するときには、近所の方に声をかけ、訓練の様子を見ていただいている。

GHと専門職とのネットワークは多岐にわたっている。利用者が日中活動で利用している事業所との連携、および相談支援事業所との連携が必要となる。就業・生活支援センターとは、一般就労している利用者の状況共有をしている。社会福祉協議会は、日常生活自立支援事業に関わって連携している。第三者成年後見人等は、現在8名の利用者に就いているが、毎月の訪問時に様子を伝え、緊急時に対応してもらっている。弁護士は、上記でも利用があった。事業所や利用者自身が、難しい対応を迫られた場合、法律相談に出向くことがある。GHでは両者の高齢化が問題となっている。65歳以上が3名おられるが、いずれも介護保険サービスを利用しているため、ケアマネジャーやデイサービスとの連携が必要となってきている。

GHから単身生活へ移行していくためには、多くの課題がある。金銭面では、ある程度の工賃や年金収入がなければ単身生活できない。金銭管理が不十分であれば、日常生活自立支援事業や、成年後見制度の利用開始の検討が必要となる。単身生活になると、生活支援の必要性が出てくる。相談支援員等が生活支援を行なっていくため、GHよりも支援の頻度が少なくなる。

単身生活を希望する利用者に対しては、それに近い環境で生活してもらう。具体的には、16か所あるGHの中で、移動を行う。各GH内の利用者同士で会議を実施し、困っていることを自分たちで解決したり、他人からどう見られているか気付いてもらったりする機会を設けている。自転車講習、ゴミ分別、栄養管理など、利用者の課題は多岐にわたる。これらについて、利用者研修を開くなどの取り組みを行なっている。

【キーワード：障害のある人、グループホーム、地域生活支援、専門職ネットワーク、単身生活移行支援】